

受験番号

●	●	●	●	●
---	---	---	---	---

人 文 科 学

問 題 冊 子

指 示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に**40**の問題（**1—40**）があります。配点は80点満点です。
解答カードには表裏あわせて100の解答欄がありますが、41以降は使用しないでください。
3. 解答のための時間は、正味**70分**です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて70分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えの記入のしかたが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5. 答えはすべて、**解答カード**の定められたわくの中に**鉛筆**を用いて書いてください。
それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6. 一度書いた答えを訂正するには、消しゴムで**きれいに消してから**、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきり書いてください。
7. メモには**この問題冊子の余白**を用い、ほかの紙は使用しないでください。
8. 「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめてください。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9. この指示について質問があるときは、試験監督に聞いてください。ただし問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書き入れること

人間に固有の自然の探究

1

私たちは一体どこに存在しているのだろうか。私たち人類は地球に生息し、地球が宇宙のなかの銀河系に位置するとは言っても、宇宙そのものは一体どこに存在しているのだろうか。人間はこのような疑問を抱き、それに答えようとする唯一の動物であるように思われる。最近ヒッグス粒子が存在することが実験によってほぼ確証されたことがニュースとなった。私たちが知っている宇宙の物質は17個の素粒子から構成されており、宇宙の始まりであるビッグバン直後に宇宙空間を埋め尽くしたヒッグス粒子が、他の粒子の運動を妨げることで粒子に質量を与え、それによって粒子が結合し原子などの物質が生成したとされる。人類が物質を構成している究極の粒子を理論的に予測し、それを実験によって確証したことに驚愕の思いを禁じ得ない。他方で、これまで人類が解明した物質が宇宙に存在する物質のわずか4パーセント程度に過ぎないとされていることにも別の一層大きな驚きを感じざるを得ない。

人間の身体もまた他の物体と同様に粒子の集まりである。原子論は古代から存在し、人間は原子の集まりに過ぎないと主張されてきた。しかし私の身体が原子から成り立っているという事実は、「私」とは何かという問いの答えになりえるだろうか。物体を極限にまで分割すると原子に到るという科学的事実と、「私」という存在が今こうして生きていることの意味にどのような繋がりがあるのだろうか。物質的自然を探求する自然科学と、「私」という存在を扱う人文学の間には一見したところ連続性が存在しないように思われる。

現生人類が誕生してから約25万年が経過したとされる。人間以外の動物と人間の違いは、人間が本能のままに生きることによっては生活を維持し子孫を残していくことができないことである。広い意味で本能と呼ぶことのできる生まれつき備わった行動のプログラムに従って生きる動物の場合、親と同様の行動パターンを反復して生きることが最善の生き方となる。逆の言い方をすれば、彼らは最善の生き方しかすることができないし、また最善の生き方とは、個体の生存と種の保存をかつてと同じように確保する生き方に他ならない。それに対して人間は本能が破壊された動物ともいわれる。人間にとって、自然に仕組まれた行動の模範は非常に脆弱であり、食欲や生殖の欲求などのより基本的な欲求を満たす方法すら自然によっては決定されていない。その理由は、人間の行動が個体のレベルでは完結しないからと考えられる。人間の個体のあらゆる行動は、個体が置かれた環境と、個体が他の個体と取り結ぶ関係に応じて決まるのである。

私たち人類の祖先はどのように生き延びてきたのだろうか。人間は生き延びるために、自然の恵みをエネルギー源として体内に取り込まなければならない。しかし自然界に存在する

すべての動植物が食に適しているわけではないし、自然界に生きる動物をいつでも容易に捕獲できるわけでもない。私たちの祖先は食べられるものと食べられないものをどのようにして区別したのだろうか。またたとえ身体に有益な食物であっても、そのまま直接口にできる食物は限られている。よくよく考えてみると俊敏で獐猛な動物を安全に捕獲し、食に適したものへと加工するのは相当に複雑な作業であり、それを成し遂げるためには極めて幅広い高度な知識や判断力が要求されることがわかる。人間は料理を行う唯一の動物であるだろうが、料理は美味を追求するための贅沢ではなく、それなくして私たちは、自然に存在する恵みを人間らしい仕方ですみかに体内に取り入れることができないのである。また人間は自然の気温や気候の変化に対応して生きるために、雨露をしのぐ住処や身体を覆う衣服なしでは生きられないが、どのような仕方ですみかに住処を整え、またどのように衣服をしつらえるのかを個人がすべて独力で知ることにはできないだろう。このような事を考えると、人類が動物のような本能をもたないで (a) 生き延びてきたのは奇跡的な事柄に思えてくる。いったい私たちの祖先はどのようにしてこれらの知識を手に入れたのだろうか。

だがこれらの疑問への回答は意外なほど単純なものであり得る。一言で述べるならば、習慣や慣習に従って生きてきたのである。個体としての人間はたとえどれほど優れた知能を有していたとしても、どの動植物が食に適していて、どの動植物が人体に有害であるのかを A に知ることにはできない。ある物の性質は、異なった対象に対して異なった仕方ですみかに現れるからである。人間は独力で成長することができないばかりでなく、成長した後も独力で自分の生活を維持することもできない。人が生き延びることができたのは、共同体に属することで個人では達成することのできない能力と力と安定を確保することができたがゆえに他ならない。自分の祖先や仲間達が食べているものと同じものを食べることが安全であり、それ以外のは安全が保証されていないことは経験の教える事実である。食物の選択にとどまらず、住処や衣服の選択や、他人との交際の仕方、配偶者の選択や子育てに到るまで、生き方に関するすべての作法は、自分の存在を生み出し、自分たちの生存を可能にした共同体の習慣や慣習に依拠するものであり、またそうでなければならないものでもあった。なぜならば、共同体の習慣や慣習は、それらに従う限り少なくとも自分達の祖先を生かしてきたのと同等の安全と生存の保証を与えてくれるが、その反対にそうした習慣や慣習に従わないことは、共同体全体を危険に陥れることになるからである。

いわゆる原始的な部族には、合理的な説明が難しい様々なタブーが存在していたことが知られている。タブーこそ、共同体そのものをそれ以前のあり方と同等の仕方であらゆる危険から守ってくれる行動規範の象徴だったのである。タブーを守ることは、個人の合理的理解を超えた権威に服従する行動様式を受け入れることである。それは言い換えれば、自分が本質的に共同体的存在であることを承認することでもある。それ故に、タブーを犯すことは、共同体の全成員を危険にさらす事柄として処罰の対象になったと思われる。約1万年前に農

業革命が始まるまでの人類の進化はそれ以降の1万年と比べ、総じて驚くほど遅かった。タブーによって支配された社会は過去が未来を束縛し、未来が過去を模倣する社会であり、社会の慣習の変化は恐れられ、極力抑制されていた。それゆえそうした共同体は驚くほど長い間、同じような生活のあり方を続けることができたのである。いや、同じような生活のあり方を続ける共同体だけが、生き残ったのであろう。

人類が部族単位で生活していた時代には、自分達の生き方がそれ自体で正しいかどうかを個人が勝手に判断することはなかったであろう。共同体の存続は個人に対してア・プリオリに与えられる掟に従い、共同体に固有の規範を尊重することに依存したから、人々が規範の絶対性を疑うことは許されなかった。しかしそれによって神聖とされた共同体の規範は、あたかも人間が自然の本能に従っているかのような画一的な行動様式をもたらしたのである。

旧約聖書の『創世記』に、神がアダムに「善悪の知識の木」の実を食べてはいけないと命じる記述があるが、その記述にはタブーの持つ力を明確にし、思想的に対自化しようとするモチーフを読み取ることができる。タブーは本来人間にとって単なる迷信でも不気味な恐怖でもなく、個人を共同体的存在とする究極の規範である。共同体的存在としての人間はタブーなしには存続しえない。タブーの権威は人間が共同体に従属する存在であることの証といえる。タブーを究極の形で本来のタブーとして認めること、すなわちタブーを神が与える掟として位置づけることで初めて人間はタブーから自由になるのである。

ところが、そのような原始的な人間の生き方に決定的な変化をもたらす事態が生じた。それは農業革命がもたらした定住による都市の成立であった。とりわけ都市が大規模になると、一つの部族が、他の部族を完全に吸収し、他の部族の習慣を自分達の習慣によって全面的におき変えてしまうという単純な行動様式は成立しにくくなる。異なった習慣をもつ複数の部族の成員からなる都市では、生き延びるための方法としてどの部族の習慣を採用するのが最も適当であるかが、部族間の単なる力関係とは異なる仕方で問題にされる余地が生じた。その際の新しい基準こそ、合理性の萌芽と見なされるべきものと考えられる。そこでは、共同体にとってより有利な習慣の規範をめぐる議論が成立し、ある者はその議論において卓越した能力を発揮することで尊敬を集め、指導者と仰がれることになったであろう。であるから、哲学が都市の発生に伴って成立したことは決して偶然ではない。二千数百年前の地中海沿岸のイオニア地方で西欧社会に今日まで続く学問の基礎としての哲学が生み出された。都市に住む異なった習慣をもった多くの人々が受け入れることのできるより普遍的な行動規範を正当化する主張は、世界とは何か、存在とは何かという最も普遍的世界観に基づいてなされた。世界とは何かという問いに答えるために、最初の学問が自然を対象とし、その原理を探求しようとしたことには十分な理由がある。

アリストテレスが最初の哲学者とみなしたイオニア学派の創始者のタレスは、万物のアルケー（始源・原理）は水であると主張したとされる。もちろんタレスは、この世界に存在す

るものが水だけであるというような不合理なことを主張したのではないだろう。専門的な論証は措くとしても、土や火が水ではないことはタレスにもまた誰の目にも明らかであったに違いない。しかしタレスは水がすべてのものの存在に根源的な役割を果たしていると主張することで、現実存在する力関係や過去の習慣とは異なった次元に事物の真理の根拠を求めるという新しい思考方法を提示したのだ。それは擬人化された神による世界創造の神話とはまったく異質というべき思考をもたらしした。新しい思考は、新しい生き方を生み出すものである。つまりタレスにとって世界の始源についての哲学的主張とは、人々が因習にとらわれないで真理に従って生きる可能性を切り開く思考方法の革新であったのだと思われる。このように考えるならば、たとえ哲学が自然についての探究から生じたのだとしても、それは人間の生き方とは無関係にいわゆる没価値的な客観的知識として成立したのではないということの意味する。今日においても自然科学はそれと同様の仕方で、(b) 人間の生き方を変革する意義を持っているはずである。ここに自然の探究と道徳的な生き方の探究が重なり合う学問本来のあり方が示されているといえる。真理は既成の価値観にとらわれず、現実を変革する力であるから、人々は真理を得ることによって同時に自由な生き方を獲得することができるのである。

2

ところが、古代ギリシャの都市の発展が爛熟期を過ぎて衰退へと向かう頃、人々は自然をイオニアの初期の哲学者とは違った仕方でとらえ始めることになった。タレスにとって因習を打ち破る根源的な意味での道徳的概念であったはずの自然が、アテナイのソフィストたちによって完全に道徳や規範と切り離され、本能的な人間の欲求として理解されたのである。彼らは、自然 (physis・ピュシス) と規範 (nomos・ノモス) を峻別し、規範が自然に反するものであると主張した。いわく、人間にとって欲求は自然であり、それは変更できない。ところが規範は、人間の社会によって任意に定められたものであり、それゆえ移り変わるものに過ぎない。人間は作り事ではなく、真実に存在する自然を重んじて生きるべきである。それゆえ人間にとってよりよい生き方とは、欲求という変更することのできない人間にとっての自然に従うことであり、その妨げとなる人為的産物としての道徳は自分の利益のために最低限の仕方で利用することが自然本来の人間の善い生き方である、と。ソフィストの一人、カルリクレスは望ましい生き方について次のように述べている。

「人間は、およそどんなものにもせよ、何かに隷属しているのであれば、どうして幸福になれるだろうか。いや、むしろ、こういうふうにするのこそ、自然本来における美しいこと、正しいことなのだ。それを今、ぼくはあなたにざっくばらんに話してみよう。

つまり、正しく生きようとする者は、自分自身の欲望を抑えるようなことはしないで、欲望はできるだけ大きくなるままに放置しておくべきだ。そして、できるだけ大きくなっているそれらの欲望に、勇気と思慮とを持って、十分に奉仕できる者とならなければならない。そうして、欲望の求めるものがあれば、いつでも、何をもってでも、これの充足をはかるべきである、ということなのだ。〔略〕ソクラテスよ、真実には—その真実を、あなたは追究していると称しているのだが—こうなのだ。つまり、贅沢と、放埒と、自由とが、背後の力さえしっかりしておれば、それこそが人間の徳（卓越性）であり、また幸福なのだ。それ以外のあなた方の言うあれらのもの〔正義や節制〕は、うわべを飾るだけの綺麗事であり、自然に反した人間同士の約束事であって、愚にもつかぬもの、何の値打ちもないものなのだ。〕

プラトン『ゴルギアス』（491E-492C）加来彰俊訳、岩波文庫

ここに、(c) 自然をめぐる認識の転倒を見てとることができるだろう。学問的探求の対象であった自然が、単に誰もが持つ欲望と理解され、それが個人のしたい放題のエゴイズムを正当化する根拠とされたのである。この事態はまさに (d) タブーなき状態に他ならない。そこでは、個人の主観的状态に過ぎない欲求が、人々にとっての唯一の行動規範として正当化されることと引き換えに、自然は共同体の世界観の基礎としての意義を失うことになる。個人の欲求は共同体に生きる人々の秩序の基礎とはならない。無制約な欲望の解放は道徳を否定するだけでなく、無秩序や道徳的ニヒリズム、そしてそれらに伴うあらゆる混乱をもたらし、ひいては人間の共同体的本質を破壊する。こうした事態に対して、真の哲学者が異論を唱えたのは当然のことであった。ソクラテスはそうした哲学者のひとりである。

さて古代ギリシャ社会において強い都市は他の都市を征服し、一握りの市民が奴隷制の上に豊かな生活を実現した。ソフィストたちが主張するエゴイズムと欲望による支配は、共同体が蓄積した富や、共同体が保証する秩序によってはじめて可能になったのである。もしも共同体の秩序が保たれず、人々の協働によって生み出される社会の富が存在しなければ、個人が好き勝手に生きる余地もなく、もちろん自分の労働が生み出す以上の富によって欲望を満たすこともできないだろう。共同体の利益と撞着する自己利益の追求は、自己利益の基盤そのものを掘り崩す行いである。道徳は共同体の秩序と人々の協働を可能にするための規範であり、道徳に違反することは共同体を弱体化させる。この点でソフィストたちが主張するエゴイズムの生き方は自己破壊的である。またそれ以上にタブーなき状態は人間の共同体的存在としての本質を否定することに通じると思われる。

ソフィストたちは自分の欲望の充足が善であることに疑いを持つとはしなかった。「無知の知」という有名な標語によって、ソクラテスはソフィストたちが、自分が本当には知らないことを知っていると思い込んでいる事態を告発したのである。しかし人々はなぜ欲望を追

い求めようとするのだろうか。人間にとって欲望の追究は必然的な本能の結果ではない。本能ではないとすれば、欲望の追究には、幸福や自由な生き方を求める営みに伴う不安が潜んでいるように思われる。私たちは人生に明確な目標を与えてくれる共同体の慣習から切り離されると自由であることに不安を感じる。何故自分が存在するのか。自分の生きる目的とは何か。これらの問いは、共同体に埋没している限り人々にとって自明であるが、しかしひとたびこれらの問いに明確な答えが存在しないことに気づくとき、私たちはいわば自己の存在の深淵を覗き込んだような不安を抱く。自由の不安に耐えられなくなるとき、私たちは欲望という自分に最も自然に感じられる善にしがみついてしまうのである。

ソクラテスのいう無知の知は、自分が善や美についての究極の根拠について知りえないという自覚の告白であった。その思想は、合理的説明を拒むものとして与えられるタブーとともに生きる人間の共同体の本質の承認と両立するように思われる。私たちにとって善い生き方についての究極の真理を知ることはおよそ不可能な事柄なのであろう。しかし人間として生きる限り、そのような究極の真理を知りえないことはむしろ幸いなことであるとも考えられる。何故ならば私たちは誰も究極の真理や究極の善が何かを完全に知ることができないからこそ、私たちにとってより善いものを目ざして共に努力を続けることができるからである。善の究極の根拠をめぐって共同体の合意が成立するためには、善は一人の個人にだけ当てはまるものであってはならない。善さの探求は、より善いものがもはや存在しなくなるまで、すなわち (e) すべての人が完全に幸福になるまで完結することはないであらう。この意味でも人間は、共同体全体の営みとして善さとは何かを問い続けるように定められた存在と言える。道徳が他者とのかかわりについての事柄である限り、道徳に関する (f) 真理は共同体に属し、いつも共同体にとっての真理としてのみ存在する。

実はこの事情は道徳に限らず自然科学の真理にもそのまま当てはまると考えられる。そもそも自然科学の知識が私たちにとって真理であるのは、その知識が第三者によって公正な立場から承認されること、もしくは誰によっても公正な仕方で反駁されないことによる。つまり科学的知識の妥当性とは、「私」もしくは「誰か」一個人が、ある科学的命題をすべて絶対的な基準に基づいて個人的に確信しているということではなく、その命題の真理をめぐる科学者集団の誠実な態度が一般的な信頼を得ているということであり、またその限りにおいてでしかないのである。科学者の誠実さとは道徳的態度であり、それゆえ (g) 科学の真理は道徳によって成立し、その正しさは最終的には道徳的な仕方で保証される。

ヒッグス粒子の発見を例にして、その発見が真理であることはいかにして保証されるのかを考えてみよう。ヒッグス粒子の発見が科学的に正しいという主張は、ヒッグス粒子の存在に基づく粒子の一般理論の諸方程式とそれを裏付けるデータが一貫しており、誤りがないことを科学者集団が承認していることに依拠する。しかし実はその正しさは科学者集団の主張だけでは完結しない。そこにあるのは、科学者集団の誠実性を科学者以外の人々が信頼して

いるという事態であり、また多くの人々の協力によって行われる実験の過程と結果のすべてが、相互に要求する最大限の誠実さに従って実施されたものであることを、それ以外の人々が信頼しているという事態に他ならない。2011年には、素粒子ニュートリノが光速を超える速度で飛ぶと報告され現代物理学の常識を覆す発見として注目されたが、2012年にそれは実験装置の誤差による誤りであったと訂正された。このことはいわゆる科学的事実がやはり人間的な営みであることを示すものと言えるだろう。近年日本で問題となった「原子力ムラ」への批判は、「専門家」が必ずしも誠実に真理と向き合わず、一部の都合に迎合しているのではないかという疑念の表明であった。研究に必要な実験装置は民間企業から契約に基づいて提供され、それに要する莫大な公的予算は、その実験が人類にとって有意義であると各国の納税者が承認することに支えられている。これらはすべて本質的に道徳によって成立する事態である。

そもそもヒッグス粒子の仮説が生み出されたのは、理論の提唱者であるジョン・ヒッグス博士一人の作業ではなく、古代から続く自然についての経験の集積が共有され、それらの研究に携わる科学者の営みが確保されえたからでもある。自然科学であれ人文科学であれ、学問は人類の最も一般的な協働作業であり、それゆえ学問を促進する基盤は人間の共同体的本質としての道徳性にある。こうした根本的な意味で、道徳は真理探究の根本的な条件といえる。私たちは共同体の本質としての道徳を発展させることによって人々の連帯を一層強めることができるし、そこから生まれる真理は人々の生の条件を改善するものとなりうる。文明以前の私たちの祖先が共同体の習慣や慣習に従って安定した生活を確保したことに代わって、私たちは真理を導きとして人類という普遍的な共同体の中で人間としての能力を拡大し、より善い生を生きること追求してきた。少なくともこれが文明社会の成立と発展を可能にした原理の一つであった。

ここで確認しておきたいのは、道徳の探求とは世間で善いとされる生き方に無批判に従うことではないということである。既存の道徳規範を絶対視する生き方は、部族社会においてタブーを絶対視した生き方と何ら異なるものではない。どの共同体にも特有の常識が存在するが、学問はその常識と対決することで成立する。(h) 常識は学問の永遠のライバルであり、その対決からは新しい常識が生まれる。道徳の探究は世間の常識を徹底的に批判し、人々のもつ道徳の概念そのものを解体しようという形態をもとりうるものである。青年達の世俗的な生き方を批判したソクラテスにしろ、キリスト教道徳を批判したニーチェにしろ、既存の価値観に最も過激な批判をむけることで、道徳の本質に迫ろうとした。そして一般に芸術とは、常識に曇らされた感受性に対するラディカルな批判から生まれる美によって新しい思想を生み出そうとする営みでもある。

ところで私たちの時代は二千数百年前のアテナイの状況とどれほど異なっているのだろうか。現代は個人主義や相対主義によって特徴づけられ、多くの人々が社会や共同体の絆を見失っているようにも見える。そして幸福は個人の価値観の事柄で、自分の欲望を満足させることこそが人生の目的であることを、多くの人々が当然と見なしている。先に掲げたソフィストの主張は多くの人にとって異質どころかむしろ当然であるかのようにも受け止められ、その主張にこめられた B なインパクトもなくなっている可能性すらある。その前提に立てば、道徳とは自分の都合に従って利用するだけの規則に過ぎなくなる。そして他人や共同体に奉仕するかどうかは個人の趣味の問題に還元される。道徳的に生きるかどうかは個人の価値観の問題に過ぎないと主張されたときに、私たちは明確な論理でそれを批判することができるだろうか。この意味で今日の学問はソクラテスと同様の危機的状況に置かれているのである。

私たちが共同体に生きる存在としての人間性を習得する仕方に、原始時代の人々と現代人の間には違いは存在しない。私たちはいつの時代でもまず言語を習得し、自分の周りの人々と人間としてのコミュニケーションを深め、共通の規範を身に着けることによって共同体の構成員としてふさわしい振る舞い方を学んでいくのである。自分一人だけにしか係わらない真理は存在しない。学問の真理の基準は、学問に直接携わらない人々を含む、人類という大きな共同体によって共有される正当性の広がりにある。それゆえ学問はいつも人類に普遍的な自然を対象とし、人間性を基礎とする他者との共同性に対して開かれている。(i) 学問に取り組むことは、そこに生み出される普遍的共同体に参加することなのである。

他方で、近代の科学革命以降の時代を特徴づける科学技術の進歩は人間の生活を飛躍的に快適なものとしたが、科学への信頼は道徳規範に関してはエゴイズムの主張を正当化することとなった。科学的知識と道徳的知識の間の連続性を見失ったことの帰結から、科学は客観的な事柄を扱い、道徳は主観的な事柄を扱うという二分法が成立した。17世紀の哲学者トマス・ホッブズは、こうした危険性を踏まえて、道徳哲学が自然科学と同じ原理で説明されることを示そうとした。18世紀の哲学者ジョージ・バークリーは、精神による知覚から切り離された物質は存在しないと主張し、人間の存在を道徳や信仰の領域に確保しようとした。また同じく18世紀の哲学者デーヴィッド・ヒュームは物体の認識と道徳の認識が、人間にとっての自然として同じ原理によって説明できることを主張し、道徳についての学問を「人間の科学」として確立しようとした。これらはすべて道徳を、個人を無自覚に拘束する因習や、個人の主観的なエゴイズムから解放し、より普遍的な共同体にとっての真理によって基礎づけようとする試みに他ならない。

欲望に従うことが自然に従うことであるとする立場は、欲望を自然の掟とみなす主張であ

る。だが個人に固有の感覚である欲望を共同体の規範として認識することは不可能である。そもそも古代ギリシャにおける哲学の成立によって私たちが手に入れた (j) より人間らしく生きる可能性とは、習慣や慣習によって与えられた価値観を絶対的なものとすることなく、一般的な合意の基礎とすることができる真理に基づいて、時間的にも空間的にもより広範な人々の連帯を作り出す生き方であった。学問に本当に必要とされることは、今も昔も変わることはない。それは真理を導きとして私たち人間に固有の自然を探究し、共同体の因習や習慣を批判的思考によって克服し、人々の幸福と自由を実現するような世界観や道德規範の在り方を求めていくことではないだろうか。

そのことの実現はたとえどれほど困難であっても、私たちにとって不可能なものであるはずはない。私たちはどれほど個人主義やエゴイズムを標榜していたとしても、他人の不幸や苦しみにまったく無関心であることはできない。たとえ「私」がそのような存在であろうとしても、共同体的存在としての「私たち」はそのことを許さないであろう。共同体に生きる人間としての私たちが求めるべき真実とは、こうした感受性によって示されるものである。真の教養とは、私たちが個人としての弱点と偏狭さを克服し、真理を基礎として開かれた共同体を形成しようとする態度を培うことにある。なぜならば、(k) 私たちの存在は共同体に基礎づけられた信念によってはじめて確保されるからである。

次の問題（1－40）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。各問題につき、a, b, c, d のなかから最も適切と思う答えを一つだけ選び、解答カードの相当欄にあたる a, b, c, d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

例 

   

1. 「原子論」に近い立場の理論を主張した哲学者とその代表的主張はどれか。
 - a. ヘラクレイトス、「万物は流転する」
 - b. モンテーニュ、「私は何を知っているか」
 - c. ヘーゲル、「現実的なものは理性的である」
 - d. ホッブズ、「万人の万人に対する戦争」

2. ピュシス (physis) という語と関係の深い語はどれか。
 - a. 物理学
 - b. 哲学
 - c. 心理学
 - d. 数学

3. 人類が (a) 生き延びてきたのは奇跡的と筆者が考えるのは何故か。
 - a. 人間は動物よりも自然から過酷に扱われており、独力で自然の恵みを獲得し、共同体を作らなければならないから。
 - b. 人間は動物と異なり、生きるための方法を親から学ぶだけでなく、共同体の習慣や慣習を習得しなければならないから。
 - c. 人間は自分達よりも獰猛な動物と戦い、寒さから身を覆う衣服や雨露をさける住処を整えなければならないから。
 - d. 人間は動物よりもはるかに多様な仕方で自然環境の変化に対処しなければならず、その方法は本能として知られるものではないから。

4. 次のうち一般にタブーとは言えない例はどれか。
 - a. 日本で鎮守の森の木を切ること。
 - b. イスラム教徒が豚肉を食べること。
 - c. 未成年者がたばこを吸うこと。
 - d. 多くの原始的民族での親族間の結婚。

5. 人間が文明以前に過酷な自然の中で生き延びることができた理由のうち最も重要と筆者がみなしているものはどれか。
- a. 本能の代わりに動物よりも高度な知性を持ち、経験に基づく合理的な基準に従って様々な状況に対処したこと。
 - b. 共同体を形成し、個人では達成することができない大きな力と能力を身につけ、互いの安全を確保する契約を結んだこと。
 - c. 自分が属する部族や共同体のタブーを重んじることの重要性を自覚し、自由を求めることの危険性を認識していたこと。
 - d. 食物の選択や住処や衣服の選択、他人との交際の作法などあらゆる行動が、共同体の習慣や慣習に従って行われたこと。
6. 空欄

A

 に適当な言葉は次のどれか。
- a. 仮説的
 - b. 演繹的
 - c. 帰納的
 - d. 類比的
7. 原始的な部族社会においてタブーを守ることの重要な意義は、本資料によると次のうちどれか。
- a. 未来を過去によって拘束し、社会を危険にさらす可能性のある変化を許さないこと。
 - b. あらゆる危険から部族を守るための厳格な指令の根本原理を知ること。
 - c. 自分自身を本質的に共同体に依拠した存在とする行動様式を受け入れること。
 - d. 共同体の存続が個人の都合に優先されるべきであることを全員に納得させること。
8. 旧約聖書『創世記』にある神による禁止の意義について、筆者の考えとしてふさわしいものはどれか。
- a. 神は自分の命令だけに人々が服従するようにするため、善悪を知る木の実を食べてはならない理由を明らかにしなかった。
 - b. 善悪を知る木の実を食べてはならない理由が示されていないのは、共同体の本質が個人の合理的理解を超えた根拠に基づくことを含意している。
 - c. 究極の禁止が神からのみ発せられることを明らかにすることによって、タブーの恐ろしさを正当化し、神を崇拝することの重要性が強調されている。
 - d. 人間は禁止の理由がわかってしまうと自分の都合によって掟に違反しようとするため、恐怖や迷信による人々の自由の制約が必要となる。

9. 「ア・プリオリ」の意味として適当なものはどれか。
- a. 肯定的
 - b. 否定的
 - c. 先天的
 - d. 後天的
10. 本資料によると、都市の成立が合理性の成立をもたらした事情として重要なものはどれか。
- a. 農業は、狩猟採集にくらべて経験や偶然に依存する度合いが小さいため、人々の合理的思考が一層重要になったこと。
 - b. 異なった習慣をもった人々が一緒に生活することで、自分の習慣と他の習慣のどちらが望ましいのかを比較する機会が生じたこと。
 - c. 力の強い部族出身の人々が、しばしば力の弱い部族の習慣を無視し、無理やり自分たちの習慣を押し付けようとしたこと。
 - d. 都市の成立にともない、祭司階層など直接肉体労働に従事することなく全体の計画を指導する知識階層が発生したこと。
11. 都市における行動規範を正当化する原理と、自然的世界の探求とが結びつくと言われる理由として筆者の考えに合致しているものはどれか。
- a. 異なった部族の人々にも当てはまる規範の基礎として、部族の慣習であるという以上の理由が必要とされたから。
 - b. 人々が自然に働きかけ、自然とかかわる際には迷信ではなく、自然についての科学的な知識が必要とされるから。
 - c. 人々の行動を一致させ、協力関係を結ぶためには、全ての人が同じ世界に住んでいることを理解する必要があったから。
 - d. 人々が知的好奇心から、自分たちを取り囲む自然的世界がどのようなものかを探求しようとするのは自然だから。

12. 筆者の考えではタレスの主張の重要な道徳的意義はどのような点に認められるか。
- a. 万物の始源が水であると主張することで、この世界の真実を観察によって確認しようとする経験科学的な思考を生み出したこと。
 - b. 万物の根源を水であると主張することで、万物が海から生じ、姿を変えながら循環して存在しているという科学的世界観を生み出したこと。
 - c. 万物の根源を水という物質に認めることにより、神による世界創造という宗教的な世界理解を不可能にしたこと。
 - d. 万物の根源を水と主張することにより、習慣や因習に従った世界理解とは異なる、普遍的な世界理解の可能性を提示したこと。
13. 筆者が指摘する自然科学において (b) 人間の生き方を変革する意義とはどのような事態か。
- a. 何が栄養になる食べ物かを知り、どのように獲物を捕獲し、どのように調理したらよいのかを合理的に考えることができるようになること。
 - b. 自然科学の進歩がもたらす技術革新によって人々の暮らしが便利で快適なものになり、苦労しないで生きていけるようになること。
 - c. 習慣や慣習に依拠した世界観から生まれる行動様式を根本的に疑い、それとは異なった考え方に従う可能性が生じること。
 - d. 自然科学と人文科学が分離し、相互に影響を与えることによって、人々の生き方についての思索が深められるようになること。
14. 本資料によれば、ソフィストたちによる自然と規範についての主張として適当なものは次のうちどれか。
- a. 自然は人間によって変更できないものであるから絶対的であるが、規範は国や時代によって変遷するから相対的である。
 - b. 人間は自然な身体的欲求を変えることはできないが、道徳は変えることができるから、道徳によって欲求を守るべきである。
 - c. 真に存在するものは規範であるが、規範は自然を守るために時代や地域の状況に応じて変化するものである。
 - d. 自然は社会の規範によって規制されるべきものではなく、人間が本来持っている理性によって探究すべきものである。

15. 下線 (c) 自然をめぐる認識の転倒とはどのような事態か。
- a. 本来タブーとして禁じられた自然の本質の探究が、欲求という人間にとっての経験的事実として解明されたこと。
 - b. 共同体の習慣や慣習によって守られていた世界観の基礎としての自然の理解が、哲学的探究によって真理として示されたこと。
 - c. 習慣や慣習から人々を解放する真理の根拠として探求の対象であった自然が、自明の人間的事実へと貶められたこと。
 - d. 自然の探求が進むにつれ、共同体の存続のための手段であるべき学問探究が、人間の欲望を満たすための手段とされたこと。
16. 本資料によれば下線 (d) タブーなき状態の問題点とは何か。
- a. 支配階層に属する一部の人々の利益を支えるために戦争と征服を繰り返し、弱い人々が犠牲になること。
 - b. 人間のエゴイズムが無制限に解放され、共同体に仕えることこそ人間にとって一番大切な生き方だという思想が否定されること。
 - c. 人々の自由を可能にする共同体に蓄積された富や秩序が破壊され、もはやエゴイズムそのものが不可能になること。
 - d. 人間が共同体的存在として生きることの象徴としてのタブーの喪失とともに、人間存在の共同体の本質そのものが失われること。
17. ソクラテスの課題とは何であったと考えられるか。
- a. ソフィストたちの自然と規範の峻別の主張を吟味すること。
 - b. タブーの存在意義を人々に教えること。
 - c. 自然の原理を人々と共に探究すること。
 - d. 個人の欲望を実現する方法を正当化すること。
18. 人々が欲望を追い求めようとする理由は、筆者の考えるところによると何か。
- a. 人間は自然に属するが、欲望はすべての人に備わっている自然であり、それを満たすことが人間の自然な目的であるから。
 - b. 欲望を満たす方法は、本能が壊れた存在としての人間には決まっていないからこそ、その方法の人々とともに求めることが重要であるから。
 - c. 共同体の慣習から切り離され自由にされることにより、人間ははじめて本当の意味で自分自身のために生きることができるから。
 - d. 共同体の絆によって与えられるはずの生き方を見失い、自由に自分で行為の目的や価値を選択することに不安を感じるから。

19. 筆者はソクラテスの「無知の知」をどのように理解しているか。
- a. 善の根拠が人間の理解を超えたものであるという主張は、原始時代に共同体がタブーを中心として統合されていたことの論拠となりうる。
 - b. ソフィストたちは自分の欲望を満たすことが善いことであることを知っている点で「無知の知」を克服している。
 - c. 神は人々を無知の状態に留めるため善悪を知る木の実を食べることを禁じたが、その実を食べたために人類は無知を克服することができた。
 - d. 「無知の知」の強調は、自然を探究することによって新しい世界観をもたらそうとしたイオニアの哲学者たちの意図に反する。
20. 善や美についての究極の根拠を知ることができないことは幸いだと筆者は考えている。その理由として最もふさわしいものはどれか。
- a. 究極の真理を知りえた人間は人間というよりも神のような存在になるだろうから。
 - b. 究極の真理を知りえないからこそ仲間とともに真理を求めて生きることができるから。
 - c. 究極の真理を知りえないからこそ人間は自分に正直に生きようとするから。
 - d. 究極の真理を知りえないからこそいつまでも共同体のタブーが守られるから。
21. 筆者が真理の根拠と考えるものはどれか。
- a. 共同体による一般的信頼
 - b. 理性による厳密な確信
 - c. 科学者の誠実な良心
 - d. 科学者集団の合意
22. 善をめぐる探究が (e) すべての人が完全に幸福になるまで完結することはないと筆者が主張するのは何故か。
- a. 善は個人的なものであり、ある人の主張する善は、その人に幸福をもたらすものであっても他の人に同じように受け入れられるとは限らないから。
 - b. 人間は、完全性を実現するまで肉体の限界を超えて永遠に努力を続けるように定められているから。
 - c. 善とは共同体の視点に基づいてなされる判断であり、誰か一人でも不幸であれば、より大きな善を実現するためのさらなる改善の余地が存在するから。
 - d. 善についての主張が正しいかどうかを判断する基準は、その主張には含まれないので、正しさの基準をめぐる探究は無限に続くことになるから。

23. 筆者の主張する (f) 真理は共同体に属するとされることの説明として適切なものはどれか。

- a. 真理はすべての人々を幸福にし、共同体全体の功利性を高めることを本質とする。
- b. 道徳的真理は個人的なものであるが、科学的真理は客観的で共同体的なものである。
- c. 科学的真理の確かさは、科学者集団が誠実に実験を行い、検証を重ねることではか可能ではない。
- d. 真理は一般的他者の同意によって支えられるから、真理の主体は共同体である。

24. (g) 科学の真理は道徳によって成立するとされる理由は次のどれか。

- a. 最先端の科学的仮説や理論を検証するための実験結果が本当に正しいかどうかは一部の専門家にしか分からないから。
- b. 専門家の権威は、専門家が誠実に真理と向き合っていることを専門家以外の人々が承認していることに由来するから。
- c. 専門家間で意見が分かれる問題を解決するためには、どちらの側も相手の言い分を誠実に検討することが必要だから。
- d. 科学者の主張が正しいかどうかは、究極的には証明できず、私たちは自分自身の良心に従って正しいと考えるものを信じる他ないから。

25. 本資料によると、文明社会の成立と発展を可能にした原理は次のどれか。

- a. 文明以前には、共同体の習慣を中心として共同体を守ろうとしていたが、文明以後は真理に基づいて人々の力を結集させることで共同体を発展させてきた。
- b. 文明以前には、タブーを疑わないことで共同体を守ろうとしていたが、文明以後はタブーを批判し、悪い習慣を否定することで共同体を発展させてきた。
- c. 文明以前には、タブーへの恐怖によって人々に道徳的な生き方を強制しようとしたが、文明以降は個人の自由を尊重することで共同体の秩序を確保しようとしてきた。
- d. 文明以前には、共同体の習慣に従うことで確実な生を確保したが、文明以降は合理性に基づいて確かな生を保証することで共同体を発展させてきた。

26. (h) 常識は学問の永遠のライバルの意味として適当でないものはどれか。

- a. 常識への疑いは学問が成立する契機となる。
- b. 学問は常識を完全には克服できない。
- c. 学問的知識は後の時代の常識として再び吟味される。
- d. 学問はいつの時代にも常識に反する。

27. 筆者が現代とソクラテスの時代状況に共通すると見なす危機の説明として最も適切な記述は次のどれか。
- a. 一部の人々が社会の繁栄を謳歌し、犠牲となっている人々への配慮を忘れていること。
 - b. 人々が自分の利益や欲望の満足を求め、人間の共同体的本質が見失われていること。
 - c. 世界の根源についての探究が人々の一般的信頼を得られないまま行われていること。
 - d. 道徳的に生きることが個人の趣味の問題であるという主張に反論できなくなったこと。
28. 文明以前の人々が現代人に比べて迷信的であるとみなされない理由として本資料の論旨と最も適合する説明はどれか。
- a. 人間本性はいつの時代でも変わりなく、科学がどれほど発展しても人々の迷信深さを改善することはできないから。
 - b. 正しい信念と間違った信念を区別する基準は、絶対的なものではなく、その信念が安定した習慣の基礎として妥当するかどうかによって依存するものだから。
 - c. 人間が自然の一部である限り、どれほど科学的知識を蓄積しても、自然とは何かを完全に理解することは人間の理性の働きを超えた課題であるから。
 - d. 原始時代の人々が過酷な自然環境の中で生き延びてきたという事実は、彼らが私たちと同等の知識と能力を有していたことを示しているから。
29. 空欄

B

 に入る語句として適当なものは次のうちどれか。
- a. 懐疑的
 - b. 合理的
 - c. 破壊的
 - d. 建設的
30. (i) 学問に取り組むことは、そこに生み出される普遍的共同体に参加することという筆者の主張の説明として適切なものはどれか。
- a. 人間性の普遍的な次元に与ることができる。
 - b. 共同体に固有の特徴を知ることができる。
 - c. 自分の祖国を強くすることができる。
 - d. 人々の知的レベルが質的に向上する。

31. 科学技術への信頼が道徳規範に関するエゴイズムの主張に通じるとされる理由は何か。
- a. 自然科学が扱わない領域である道徳は、個人の主観的な主張に過ぎないとされるから。
 - b. 自然科学だけを厳密な学問と認めることで、人間は道徳について学問的に考える必要がなくなると思われるから。
 - c. 自然科学の進歩は宗教批判へと通じ、人々を無神論へと駆り立てることによって、道徳の基盤を切り崩すことになるから。
 - d. 人間の感性的側面に基づく道徳は自然科学の合理性と区別され、科学と道徳の二元論が成立するから。
32. 筆者が主張する (j) より人間らしく生きる可能性にはどのようなものがあるか。
- a. 他者と対話することで自分に課せられた制約を意識する生き方を始めること。
 - b. 科学の進歩がもたらすテクノロジーの恩恵を受け便利で快適な生活を送ること。
 - c. 自然の探求によって得られる世界観の基礎の上に、開かれた人々の連帯を実現すること。
 - d. 共同体の習慣だけでなく、個人の趣向を大切に、個人的な幸福を求めて生きること。
33. (k) 私たちの存在は共同体に基礎づけられた信念によってはじめて確保されるという主張の説明として適切なものを選べ。
- a. 私たち人間は、個々人に様々な形で与えられた能力によって生きる。
 - b. 私たちの存在は、共通の世界観によってもたらされる互恵的な活動によって可能である。
 - c. 私たちの存在は、自然の探求に基づく科学技術の進歩によって可能である。
 - d. 私たちの存在を可能にするのは、タブーを正当化する超越的な神に対する敬虔な態度である。
34. 本資料の論旨によれば、科学的知識と道徳的知識はどのような関係にあるか。
- a. 科学的知識には実験によって検証される客観的な真理が存在するが、道徳的知識は主観的であり、そこには真理は存在しない。
 - b. 科学的知識も道徳的知識も根本的には共同体の承認によって真理と認められる点で同一の本質を持つ。
 - c. 科学的知識は、道徳的知識に支えられて初めて真理になりうる点で、道徳的知識のほうがより真理に近い。
 - d. 科学的知識にも道徳的知識にも絶対ということはあり得ず、どちらも個人の選択にゆだねられるべき相対的真理である。

35. 中国思想を代表する理論で、人間世界の規範から宇宙の根本的な規律や原理までを幅広く意味する概念は次のどれか。
- a. 儒
 - b. 義
 - c. 気
 - d. 道
36. 本資料で展開された「自然」概念の特徴として適当なものを選べ。
- a. 自然とは、人が生まれながらにもっている本性のことである。
 - b. 自然とは、人間の活動によって汚染される以前の原始的な状態を意味する。
 - c. 自然とは、共同体の連帯の基礎として探究されるものである。
 - d. 自然とは、習慣や慣習の支配する私たちになじみのある状態のことである。
37. 本資料によれば「私たち」はどこに存在していると言えるのか。
- a. 粒子の集合の中
 - b. 広大な自然の中
 - c. 永遠の真理の中
 - d. 共同体の中
38. 擬人化された神による世界創造を語っている物語は次のどれか。
- a. 『古事記』
 - b. 『平家物語』
 - c. 『万葉集』
 - d. 『魏志倭人伝』
39. 芸術思想の領域において、慣習や習慣に批判的でないものは次のどれか。
- a. シュルレアリスム
 - b. アカデミズム
 - c. ポスト構造主義
 - d. キュビズム

40. 17 世紀の宇宙体系の変革をもたらした科学革命を主導した四名に通常数えられない人物は次の誰か。

- a. コペルニクス
- b. ガリレオ
- c. ボイル
- d. ケプラー